

## アジア太平洋戦期における日本の対仏印文化工作 —対仏印映画工作としての日本映画上映について—

勅使河原 章

### Japanese cultural advancement to Indochina through a movie distribution strategy

TESHIGAWARA Akira

#### Abstract

In 1939, Japan enacted a movie law to control movies by the government. In late 1940, the Information Bureau created Nanyo-Eiga-Kyokai, a movie association company, to promote Japanese movies across South-East Asia. While French cinema was yet to arrive in Indochina, a large-scale movie supply group company in Indochina called Eden had requested the Japanese Government to supply Japanese news films and cultural movies. Masayoshi Yamane, a representative of Nanyo-Eiga-Kyokai, went to Hanoi to meet the Eden Group, and after lengthy negotiations, signed a contract to supply not only Japanese news movies and cultural films but also twelve Japanese feature films per year. The first movie, *La Symphonie Pastorale*, was a success beyond expectations. Thereafter, numerous films were distributed to Indochina. By late 1942, due to the Japanese government's cultural advance policy by film to South-East Asia, the company transferred from Nanyo-Eiga-Kyokai to Eiga-Haikyu-Kaisya. By the end of 1943, the company signed a contract with another distribution company in Indochina—the Majestic Group—and subsequently, Japan established distributorship in almost eighty percent of the theaters in Indochina.

After the March 9 coup, in July and August, Japanese movies were screened in Hanoi. This was confirmed via an advertisement for movies in *Binh Minh* Newspaper. Most of the Japanese movies were so-called war propaganda movies such as *Gotin*, *Aiki Minami he Tobu*, and *L'Aube de la Liberté*; however, there were also culturally valuable films, such as *ZIHI SINTYO*, which recorded the world's first brood parasite. Thus, not all Japanese movies were propaganda movies, and cultural films with high academic value also existed.

In conclusion, seventy Japanese films were delivered to the Indochina region, and Japan made more than five movies in Indochina. The distribution of Japanese movies in Indochina was considered a commercial success.



## 目次

## はじめに

## 先行研究と問題提起

## 第1章 国際文化振興会(KBS)＝国際交流基金

1. 国際文化会館(KBS)の発足
2. 国際文化振興会と仏印大使府(1940-1943年)
3. 国際文化振興会と仏印日本文化会館(1943年—1945年3月)

## 第2章 情報局、南映、映配の、映画による文化工作

1. 映画法の制定
2. 南洋映画協会の発足
3. 南洋映画協会の活動

4. 『南洋映画協会』の二年間(1940年末から1942年末まで)のまとめ

5. 『南映』から『映配』へ

6. マジェスティックとの契約—仏印のほぼ全映画館に行き渡る長編日本映画

## 第3章 仏印処理後の状況(1945年3月—8月)

1. ベトナム語紙『ビンミン』Binh Minh
2. 広告から見る『ビンミン』
3. 1945年4月から6月のハノイの映画上映状況
4. 1945年7月から8月のハノイの映画上映状況

終わりに

## はじめに

アジア太平洋戦期に仏印<sup>1)</sup>の日本の活動について書かれた論文は多くあるが、ほとんどが日本の軍事駐留を扱ったものである。日本と仏印の文化交流について書かれたものは少ない上、いずれも1943年頃までの美術交換の交流などで終わっている。特に1945年3月仏印処理以降の8月までの活動についてはほとんど言及されていない。また文化交流活動の一環ともいえる映画活動に関しても、仏印における日本映画上映についてはほとんど書かれていない。

もとより正式な外交文書のほとんどが終戦時に破棄され、他国に散逸した断片のみの分析の研究が繰り返されてきた。又終戦からすでに75年が経過して、当時を見てきた多くの長老らは次々と物故者となり、新たな証言は期待できない[小川2020]。

本稿では、今まであまり用いられ論じられることがなかった戦中の映画雑誌、『映畫旬報』<sup>2)</sup>、『映畫評論』に書かれた仏印の映画上映状況や、ベトナム語新聞『ビンミン』に掲載された映画広告を読みとくことにより、アジア太平洋戦期日本からどのような経緯で映画による文化工作が始まったのか、どのような映画が上映されていたか、又現地の反応がどのようなであったかを明確化したい。

## 先行研究と問題提起

太平洋戦争下の仏印での文化交流活動について、芝崎敦士は『近代日本と国際文化交流 国際文化振興会の創設と展開』の中で、「国際文化交流はどのように生まれどのように変わったのか」について議論している。芝崎は国際文化振興会の活動に主点を置き、大東亜共栄圏下では、二国間の文化事業実施を目的とした国際文化振興会の活動が困難であったと指摘している[芝崎1999:161]。その中で軍政<sup>3)</sup>が敷かれず建前上は政治的に独立しているが故に主体性を発揮し得た仏印とタイの文化事業に力点を置く事ができたとしている[芝崎1999:161-162]。芝崎の研究ではベトナムでの文化交流内容について少ししか触れられていない。藤原貞朗は『オリエンタリストの憂鬱——植民地主義時代のフランス東洋学者とアンコール遺跡の考古学』の中で第二次対戦中の日仏会館の活動を中心に、教授交換(太田正雄、梅原末治)、仏印巡回現代日本画展、極東学院と帝室博物館の古美術品交換といったインドシナでの日本の文化交流活動に言及、カンボジアと日本の文化交流(美術品交換)について詳しく書いているが、ベトナムにおける活動についてはあまり詳しく言及していない。難波ちづるは「第二次大戦下の仏領インドシナへの社会的アプローチ：日仏の文化的攻防

を巡って」[難波 2006]、「第二次世界大戦期インドシナにおけるフランスのプロパガンダ—日本のプロパガンダの関係に注目して」[難波 2009]などの論文で、ベトナムにおける日本の文化活動<sup>4</sup>について言及しているものの、仏印側の反応についてはあまり言及していない。映画の宣伝活動についても野外で上映することはできたが、映画館で上映することがフランス側の思惑もあり不可能であったとしている。

本稿では、アジア太平洋戦争中、仏印の映画館で日本映画が上演されていたことを明らかにしていく。先行研究のいずれの文献、研究も仏印処理（3月9日）から8月のベトナム革命の間のベトナムの諸相についてほとんど研究されていない。その期間はわずかに白石らの研究<sup>5</sup>があるが、いずれも自伝などに依拠し、主観的視点にかたよっているとと言える。また、相手側（フランス人・ベトナム人）の反応についてはほとんど研究されてこなかった。タイについても同様であったが、加納寛は日本の宣伝活動に対するタイ側の反応について研究し、タイ語版ニュース映画の無料上映がタイ人に好評であるなどの効果を上げていた一方、日本がタイの官公庁に配布した宣伝物は黙殺されることが多かったことなどを明らかにしている[加納 2017:323]。本稿では1943年までの日本上映映画に関しどのような映画が評判良かったか、またどのような映画が現地人に受け入れられなかったか、さらに仏印処理後の状況についても明らかにしていく。

## 第1章 国際文化振興会(KBS)＝国際交流基金

### 1. 国際文化会館(KBS)の発足

国際文化交流とは、広義には「国境を越えた文化と文化の交流」という現象を指示する言葉であり、狭義には異なる国家間、および国民間において実施される事業を意味する[芝崎 1999:3]。本章では、国際連盟の文化交流活動の理念を継承して、日本で創設された国際文化振興会(KBS)の1940年から1945年8月までのベトナムでの文化活動に焦点を当てる。

日本の国際連盟協会は、1920年にパリに在住していた外交官らによって、欧米の国際連盟主義者に合わせて作られたと言われているが、実際には中国の国際連盟協会に対応して作られた[芝崎 1999:40]ともいわれている。1933年3月、日本が国際連盟を脱退すると、5月国際連盟協会は定款を改正して日本国際協会と名称を改めた[芝崎 1999:42]。一方国際連盟内に所属した学芸協力委員会は「大学、学芸、図書館など自国の知的諸団体と・・・その他、他国の同種の委員会と直接交渉して相互の協力を行う」を任務としていた[芝崎 1999:43]。これら二つの組織を引き継ぎ、また外務省、文部省、鉄道省に散在して組織を統一して国際文化事業局ができ、「国際文化振興会」として1934年4月外務省所轄下の財団法人として発足した[芝崎 1999:72-79]。英語の名称は、The Center for International Cultural Relations であるが、KBS（国際文化振興会の頭文字）という方が海外でも親しまれている。1972年9月に国際交流基金<sup>6</sup>の設立に伴い解散した[芝崎 1999:i]。その発足時の事業内容は、次の通りであった。

1. 著述、編纂翻訳及出版
2. 講座の設置並に講師の派遣及び交換
3. 講演会、展覧会及演奏会の開催
4. 文化資料の寄贈及び交換
5. 外国人の招請
6. 外国人の東方文化研究に対する便宜供与
7. 学生の派遣及び交換
8. 関係諸団体又は個人との連絡
9. 映画の作成及其の指導援助  
(以下略)[芝崎 1999:81-82]。

### 2. 国際文化振興会と仏印大使府(1940-1943年)

仏印での文化交流活動は1939年～1940年頃から始まっており、外務省の仏印の出先機関であるハノイなどの領事館が中心となっていた。1941年10月に外務省により仏印日本大使府が新設されたのに伴い、以降国際文化振興会の活動は大使府が中心となって活動を

推進し、情報部部長小川昇<sup>7</sup>総領事が統括した。特筆すべきは大使府によりベトナム人用日本語読本<sup>8</sup>が発行されたことである。

当初は日本語—ベトナム語のみであったがその後、日本語—フランス語が後ろに追加された。発行の中心は小川総領事であり小川の記述した前書きが冒頭に記載されているが語訳が微妙に相違している。フランス語訳が読者対象を「インドシナ人」としているのに対し、ベトナム語訳は読者を「ナム<sup>9</sup>人」としている。これはベトナムという言葉（及び国家）が確立してなく、「安南人」や、「ナム人」、といった様々な呼称があったことに起因する。その他当時の外交文書や新聞で大使府が主催した文化交流活動（音楽会や美術展など）が確認できるが1943年ごろを境に美術品交換などの文化交流活動は衰退していく。活動の中心になっていた小川は、栗山茂、内山岩太郎らと同時に同年（1943年）に外務省を退官した。

### 3. 国際文化振興会と仏印日本文化会館 (1943年-1945年3月)

国際文化振興会は1940年12月に、外務省から内閣府情報局の傘下に移管されていた〔芝崎 1999:164〕。したがって日仏共同支配期に南方での映画を使った文化工作の主導権をとったのは外務省ではなく、情報局であった。仏印に相互的文化宣伝機関が必要であることは国際文化振興会の常務理事、黒田清により1941年に主張されていた〔黒田 1941:77-78〕。黒田はすでに、1941年植民地当局文化局長アルベール・シャルトンと仏印および国際文化振興会との間で、(1)教授の交換(2)学生の交換(3)出版物の交換(4)出版物の相互翻訳依託(5)展覧会などの相互的開催などの取り決めをしていた。

仏印日本文化会館は、国際文化振興会の下部組織として1943年に発足し館長として元仏印資源調査団団長の横山正幸が就任した<sup>10</sup>。在仏印日本文化会館は、ハノイとサイゴンに設置され、また東京にも事務所を持った。事業内容は、次の通りである

- (1) 仏印民族風俗の調査研究
- (2) 仏印に於けるフランスの文化政策に関する調査研究
- (3) 華僑に対する調査研究。
- (4) その他の事業（学者の交換、留学生の招致、日本文芸・美術・工芸。芸能その他の紹介、日本語の普及、印刷物またはラジオによる文化紹介など）であった<sup>11</sup>〔芝崎 1999:172〕。

その後、横山はサイゴンの事務所を中心に活動することになり、ハノイ事務所は暁星中学、東京大学の後輩でありそれまで印度支那産業に勤務していたフランス文学者小牧近江にまかせた。小牧は同じくフランス文学者小松清を顧問に招いた。小牧らは日本文化会館に籍を置き、大東亜省配下でなるべく穏便に治安を維持すると同時に、日本文化をその地に広めることを目的としていた。小牧は文化会館の事務局長として、日本語学校の業務に当たっていた〔小牧 1965:160,162〕。

## 第2章 情報局、南映、映配の、映画による文化工作

本章では仏印での日本映画の上映・制作について見ていく。

### 1. 映画法の制定

文化交流活動のひとつに「映画の上映」がある。国際文化振興会〔以下 KBS と略す〕の下請け活動の一環に映画の制作があった〔芝崎 1999:161〕。一般映画に関して KBS は直接関与していないが、映画そのものが国策映画ともいえる状況にあった。

1939年9月1日、日本で映画に関する法律が制定され、その第一条は「本法ハ國民文化ノ進展ニ資スル為映画ノ質的向上ヲ促シ、映画事業ノ健全ナル發達ヲ圖ルコトヲ目的トス」と述べていた。

同法は10月1日から施行された。これと同時に勅令第668号を以て映画法施行が公布され、又内務、文



部、公正省令第1号を以て映画法施行規則も公布された。この映画法に規定するところは、

- 1, 映画制作業及び同配給業の免許制
- 2, 撮影所従業員の登録制及び就業制限
- 3, 撮影台本の事前届出
- 4, 優秀映画の選奨及び保存
- 5, 外国映画の配給数量制限
- 6, 輸出映画並に国内映画の検閲
- 7, 文化映画、時事映画（昭和15年9月9日の施行規則改正に依る）の指定上映
- 8, 外国映画の上映制限
- 9, 年少者の映画観覧禁止
- 10, 映画事業に対する命令

であった〔石巻1942:48〕〔不破1943:22〕。あらゆる映画制作が政府の統制下におかれ、撮影に入る前にシナリオを提出して許可を受けなければならなくなった。映画館は、長編映画と同時に「文化映画」と呼ばれる短編ドキュメンタリーも上映しなければならなかった。文化映画は「国民国家の知性を育み、国家精神の涵養に寄与する作品」と定義された。1933年から、プロパガンダや教育を目的とした映画やアニメやドキュメンタリーを大々的に上映することが義務づけられた〔ロファ2011:21〕。この法律の意図するところは、健全なる映画の発展を建前としていたが、実際には国家による映画統制を図るものであり、映画の検閲をするものであった。終戦後映画関係者の強い要望により映画法は、1945年12月1日に廃止された。一方、映画法により定められた「映画を、時事ニュース、文化映画、劇映画と一パックとしてまとめ、トータル2時間で上映する」という上映パターンは定着し、戦後も長きにわたり続くことになった。

## 2. 南洋映画協会の発足

南洋映画協会の発足は1940年12月6日発足した内

閣府情報局の映画行政と不可分であった。従来は対海外映画施策をするためには外務省と内務省の相談が必須であったが、元外務省メンバー伊那信男らが情報局5部に参加したことにより、調整が情報局内部で済むようになっていた。南洋映画協会発足のきっかけは、仏印発において、フランスからの映画供給が止まり上映フィルムが欠乏する中、仏印常設館<sup>12</sup>から日本のニュース映画や日本紹介映画の提供希望の要請があったことによる。それに対し、南洋方面に向かって日本映画を進出させていこうとの考えから、情報局5部が業界と話し合いを持ち「南洋映画協会」という株式会社を設立することとなったのである。5部第2課長不破裕俊が内務省、文部省、陸海軍、情報局と相談して体制を整えた〔不破1941:23〕。こうして南洋映画協会は1940年末に、「近い将来の南進体制」を見越して設立された〔映畫旬報1942年5月21日号:6-7〕。同協会は、陸海軍、内閣府情報局から調査員派遣の許可を得たほか、山根正吉<sup>13</sup>、狩谷太郎（松竹）、及び中華映画関係者から1名の参加のもとに、広東、ハノイ、サンゴン、バンコック、バタビアの映画界を視察した上で、支社をハノイに設置することとなった〔映畫旬報1941年1月1日号:11〕。ハノイ支社は1941年1月12日に開設され、サイゴン支社は翌1942年3月に開設された。

しかしながら開設当初は困難を極めた。「敵性国家（ママ）の排日政策の下ではなんら発展的な見通しをつけないありさまで資本金も185,000円で小規模なままで将来の待機的な存在でしかなかった」〔映畫旬報1942年5月1日号:6-7〕。このような困難の中の努力と日本映画の上映実績を積み重ねてきた南洋映画協会が太平洋戦争が始まると南方映画工作の中心となった。

「太平洋戦争が始まると逆に香港から南は全部この南洋映畫協会の仕事の範疇となり、一方映畫事業の全般にわたる企業統制は当時国内唯一の最大組織たるこの協会が映畫南進策の全責任を負うことになった」〔映畫旬報1942年5月1日号:7〕。

### 3. 南洋映画協会の活動

#### (1) 仏印の映画館状況

仏印の人口は2,300万人内、フランス人4万、支那人(ママ)30万人に比し安南人の人口は1,700万に及ぶ[秘田 1942:16-17]。1942年の時点で仏印には映画館が約90館あった。その中で自由経営館は20館で残りの70館は、配給兼興行会社である印度支那映画会社(エデン系)と印度支那映画劇場会社(マゼスチック系)の直営館又は系統館で両者の館数はほぼ同数である。エデン系は資本金400万フランの合資会社で、サイゴンに本社を持ち、ハノイに支社を持っている。マゼスチック系も同額の資本を擁しサイゴンに本社を置き、ハノイに支社を置いているが、前者が100%フランス人資本であるのに対し、後者はユダヤ系フランス人と華僑資本により成り立っている。

主要都市の両者の系統館をあげれば次の通りである[南洋映画協会調査, 括弧内は座席数][秘田 1942:15-16]。

[ ] 内は筆者が追記した。以下同様とする。

#### ①河内(ハノイ)市

映画会社系(エデン系)——エデン(500), オラムピア(550), モデルン(400)

映画劇場会社系(マゼスチック系)——マゼスチック(722), フィラルモニック(386), バクマイ・マゼスチック(?)

#### ②西貢(サイゴン)市

映画会社系——エデン(650), カジノ(500), モデルン(800), カジノ・ダカオ(300)

映画劇場会社系——マゼスチック, レックス・アサム・ダカラ, シネ・タンディン

#### ③堤岸(ショロン)市<sup>14</sup>[現在のホーチミン市チョロン]

映画会社系——エデン(1,000), カジノ(200?)

映画劇場会社系——マゼスチック

[秘田 1942:15-16]

1942年当時仏印に滞在していた秘田は次のように証言している。

これらの映画館はこじんまりしたうつくしい黄色の建物で、一階建てのものが大部分であって座席数を限度として入場券を前売りするので場内が混雑したり、切符売り場の前に列を作ったりしたりすることはなかった。ただ扇風機があるだけで映画館を締め切ってしまうと暑くてたまらないので、防音装置もないまま戸外まで映画の音楽や台詞が筒抜けであった。

映画館の入場料金は、一流館で、最高の<sup>ロージュ</sup>棧敷が2<sup>ビヤストル</sup>比弗半でそれから下は安楽椅子だったり、籐椅子だったりして5, 6段階に分かれ一番安いところは30<sup>スウ</sup>銭程度であるが、この席はスクリーンの真正面であるから日本の三階席の隅のように遠く斜めに見えたりすることはない。又、2, 3流の館(たとえばハノイで言えばモデルンなど)の入場料は10銭から1<sup>ビヤストル</sup>比弗半であった。観客は、一流館ではフランス人が3, 4割でいずれも<sup>ロージュ</sup>棧敷や安楽椅子を占め、その他の安南人観客用の安い席には外人部隊や兵卒以外のフランス人が座ることはなかった。興行回数は主要都市では木曜(学校が休みなので)、土曜、日曜にマチネ<sup>15</sup>があり一館によっては日曜日に限り3回興行—他のウィークデーは一回興行、夜の9時15分頃から開館されて、11時15分頃までの2時間興行である。番組は、長編1本に漫画、文化映画、ニュースなどを添え、最初に市内の商店の広告幻燈が15, 6枚も写される館もある。そして長編ものには途中で必ず中幕(アントルアクト *entracte*)というのがあって5分くらい休憩する。上映されているのはフランス映画が主であって、フランス本国で制作されるほとんど映画が仏印の市場へ送られている。日本で上映されたフランス映画で仏印で上映されないものはない。これについてアメリカ映画である。アメリカ映画にはフランス語化されたものが多く、中にはフランス語のタイトルをつけたものもあるが、フランス映画アメリカ映画で安南語スーパーを付けたものは全くなく、安南人はフランス語に通曉しない限りは、プログラムの安南語の国語(コクニユ<sup>16</sup><sub>(ママ)</sub>)を頼り

に筋を追う他はなかった。

ただしこのころの映画状況は、フランスからの交通が不可能で米国の船も入国せず、仏印では在庫の古い映画を繰り返し上映するのみであった。ドイツ映画もオリムピア<sup>17</sup>だけであり、ドイツ版フランス映画、「サンゴ礁」<sup>18</sup>「佛蘭西座」<sup>19</sup>も上映されなかった〔秘田 1942: 16〕。

後述のようにこの映画供給停止状態は終戦まで続いていた。

ヨーロッパ映画の上映が困難を極める中、日本の映画普及はどうであったであろうか。難波の研究では、日本が意図していた独自の映画館の確保がフランス側から許可を得られず叶わなかったと記載されている。日本はラジオ局だけでなく、独自の映画館も所有しておらず、日本軍の快進撃や日本を紹介するプロパガンダ映画や娯楽映画の上映を屋外や公共施設で行なったが、映画館で上映するには至らなかった〔難波 2009: 76 (1976)〕。

しかしながら、日本映画は新規欧米映画の供給停止を利用して仏印に進出することに成功したのである。きっかけは仏印のフランス系大手配給からであった。1940年仏印映画協会（エデン系）のハノイ支社長が日本映画の供給を住田機関に申し出た〔山根 1943a: 6〕。山根はハノイに乗り込み、エデン系と交渉し、困難の中、年間12本の映画を供給する契約を結ぶことに成功した。また、仏印の映画配給会社との契約とは別に、仏印の法律で、映画上映にはフランス当局の検閲許可が必要であった。劇映画の第1作「田園交響楽」がハノイのエデン・シネマで上映されたのは、ようやく1941年の10月で、太平洋戦争勃発の2ヶ月前であった〔山根 1943a: 6〕。仏印での上映映画が予想外の好評を続けるなか、太平洋戦争が勃発したときに、映画による南進文化工作の拠点作成が急務となり『南映』が南方映画工作の拠点となった。その後、戦争映画「西住戦車長傳」は却下の恐れもあったがすなりと許可され、しかもヒットするという番狂わせもあった。

どのような映画が、仏印で求められたかであるが、

1942年2月に山根正吉は、『映畫旬報』主催の対談の中で、議長として、日本に留学しているインドネシア（スマトラ）1名、タイ2名、インド1名、そして安南1名の留学生に、映画に対する意見を聞いている。対談の中で仏印に関する発言を中心にまとめると以下のような日本映画が現地人に喜ばれるかにか聞かれ、タイの学生らは「日本の時代劇が良い」というのに対し、安南の学生、呉文孟は、「今は戦争時なので日本のニュースが一番」という。「そのあとは文化映畫、日本の生活の映畫、日本の劇映畫はあまり面白くない。毎日毎日の生活が一番面白く、歴史的なものも面白くない。ラブ・ストーリーは良い」。結論として、「ラブ・ストーリー、文化のフィルムそしてニュースが良い」ということになった。一方、山根が過去にフランス人に聞くと、出席していた在留フランス人は全員「時代劇が良い」と言った。それで「南洋映畫協會は、時代劇を安南に持って行こうとしていたのだが、仏印については、時代劇は注意との結論に達した」と山根は述べている〔山根正吉、呉文孟他 1942: 15-17〕。

おもしろいことには、日本でヒットした作品が仏印でヒットしなかった一方、日本でヒットしなかった作品が仏印で絶賛を浴びるということが起きていたことである。例えば日本ではフランス文化の翻訳に過ぎないと酷評された「田園交響楽」が大絶賛を浴びる一方、日本で好評であった「暖流」「櫻の國」が不人気であったり、中国との戦争を描いて華僑を刺激する恐れがあるため、上映を取り止めるようにと警告された「西住戦車長傳」が高評価であったりしたことである。同じく華僑を刺激する懸念のあった「支那の夜」が人気を博するなど興味深い。南映時代の仏印での日本劇映画の反響について南映南方局調査部が映畫旬報に記載した記事は次の通りである。

①「田園交響楽」1941年11月2日ハノイ・エデン・シネマ封切

第一回提供日本劇映画。予想を超えた成功であった。アンドレ・ジイドの原作である点がフランス

人、安南の知識的人間層に対する吸引力を持った。この作品はフランス人、安南人相半ばしてことにフランスの若い女性が目立った。この作品は劇的興味以外に、東京の市街、病院の美しさ、手術室の完備、雪に覆われた田園風景の美が特に感動されており、日本文化の紹介としても十分の効果をあげた。[映畫旬報 1943 年 4 月 11 日号 :75]

## ②「西住戦車長傳」1942 年 5 月 15 日ハノイ・エデン・シネマ封切

一週間連続満員で、4 日間続映となる。一般の感想は 1 演出演技、映画技術皆優れている。2 日本人の愛国心の強さが安南人に対し教訓的である。3 兵が倒れた際、西住が代わりに国旗を立ててやり、これはお前が立てたのだという場面及び西住が負傷しながらもタンクに乗せてくれという場面はもっとも感動的である。[映畫旬報 1943 年 4 月 11 日号 :75-76]

## ③「暖流」

場面場面が長すぎて冗漫。怒っているのか喜んでいるのか、ともかく表情がない。洋装しているかと思うと着物を着ていたり、外国的な椅子の生活があると思うと畳にじかに座る生活が出てきたりするのとは奇異な感じを与える。映画中の人物の考え方や感じ方や動作がまるで外国人には理解し難い [映畫旬報 1943 年 4 月 11 日号 :76]。

## 4. 『南洋映画協会』の二年間(1940 年末から 1942 年末まで)のまとめ

山根は南映の 2 年について、「内部的には不備な機構と資金、人材の、資材の不足から来る困難と戦ひ、外には微妙な政治体制や当時尚根強かったアメリカ映画と争いながら、世のあらゆる毀誉褒貶の中に南映が佛印で成し遂げた業績は、海外ニュース 48 巻、佛語ニュース 20 巻、華語ニュース 10 巻、特輯日本ニュース数巻、文化映画数種、劇映画 7 本(田園交響楽、支

那の夜、西住戦車長傳、櫻の國、暖流、南海の花束、希望の青空)の配給上映であった [山根 1943a:37-38]』とまとめている。

南映の蓄積として 1942 年 8 月現在、仏印のフィルムの在庫は以下通りとなった。劇映画「田園交響楽」含め 5 本(全て仏版)、文化映画「東京—北京」含め 41 本(内フランス語版 29 本)また文化映画の中で文化振興会制作したものが「現代日本」含め 7 本(全てフランス語版)ある [映畫旬報 1942 年 10 月 1 日号 :22]。

## 5. 『南映』から『映配』へ

### (1) 南方映画工作処理要領による、南映画協会の解消と日映、映配への業務移管・再編

1942 年 9 月 11 日情報局から南方映画の新体制が発表された。「第一に南方諸地域の配給、映畫館経営、巡回映畫等は映畫会社をして行はしめる。従って南洋映畫協会は解散して、映畫配給社に吸収する」[映畫旬報 1942 年 9 月 11 日号 :6]。泰、仏印は、大使館の配下となり、その他は軍の支配下になった [映畫旬報 1942 年 9 月 11 日号 :6]。これにより、仏印での映画工作がインドネシアやフィリピンとは別の形態をとることとなった。改組により南映サイゴン支社は映配仏印支社と名称を変更し、ハノイ支社は出張所となった [映畫旬報 1943 年 4 月 11 日号 :69] 正式には 1942 年 10 月から新会社であったが実際本格稼働するのは 12 月の大東亜戦争勃発 1 周年の記念行事からであった。

南方映画工作処理要綱が発動されたことにより、南洋映画協会は解散となり、制作は日本映画会社(以下「日映」と略す)、配給と興行は映画配給会社(以下「映配」と略す)に移管された。東亜会館で 1942 年 10 月 22 日壮行会が開かれ、壮行会には情報局川面部長のみならず、大谷松竹社長、津村秀夫朝日新聞社員、ドイツ映画産業駐日代表ベルツ博士らが壮行挨拶をした [映畫旬報 1942 年 11 月 11 日号 :9]。これは国だけでなく、マスコミも一緒になって鳴り物入りの文化工作を展開しようとしていたと言える。

して行はしめる?



情報局3部 堀仁一部長は、映畫旬報寄稿で南方に赴任する社員を「戦士」とたとえた。「今般南方方面における指導啓発の第一線の戦士として、190名に垂んとする日本映画の選り抜きの諸君が勇ましく南方へ御出発することになりまして、」[堀 1942: 8]とあり新規に、南方へ190人の指導啓発の戦士が送り込まれたことがわかる。正式には1942年12月1日からであるが、仏印支社が実際に活動開始したのは、1943年1月からであった。南映時代の駐在員4名(サイゴン3名、ハノイ1名)から、映配仏印支社となり、支社長山根正吉、支社社員8名が追加配属され、サイゴンのリュウ・ペルラン200番地に事務所を開設した。ハノイは従来のパヴィ街<sup>20</sup>29番地にあった「南映」事務所は、映配仏印支社ハノイ出張所と改名をした[田村 1943: 69]。

映配調査部は『映畫旬報』1943年4月11号に次のように報告している。映配仏印支社確立(1942年末)とともに巡回映写活動が活発し、サイゴン、ハノイに映写技師が配属され一定の計画に従って、仏印南部及び北部における皇軍慰問、現地人に対する宣撫活動が展開された。上映映画は文化映画、戦記映画、劇映画等でプログラムを組むが、時に現地人の歌手が参加して、安南歌謡がアトラクションとして付け加えられることもあった[映配調査部 1943: 74]。

## (2) 映配時代の活動

### 1) 1942年12月大東亜戦争勃発1周年の記念行事として一連の企画が行われた。

12月7日 サイゴン、エデン・シネマ  
「マレー戦記」「勝利の記録」観覧者 700名  
12月8日 サイゴン、エデン・シネマ  
「空の神兵」「勝利の記録」「日本ニュース」  
観覧者 1,050名  
12月8日 ショロン、中国戲院  
「空の神兵」「勝利の記録」観覧者 1,500名  
12月8日 ペー街廣場  
「マレー戦記」「勝利の記録」

観覧者 18,000名

12月9日 ショロン、野外映写会

「空の神兵」「勝利の記録」

観覧者 10,000名

12月27日、28日 各昼夜2回 サイゴン、市民劇場  
皇軍慰問及び現地民招待映写会。

映配調査部は次のように現地の評判を報告している。

「以上の観覧者は皇軍将兵、安南人、華僑、フランス人であり、反響は多大なものであった」

[映配調査部 1943: 74-75]。

これ以降、皇軍慰問及び宣撫映写会は1943年1月1日から2月17日の間に映画回数約26で、一般邦人、現地人も参加する場合もあった。上映された映画はカテゴリー別に、ニュース、文化映画として「花と受粉」、「捕鯨」、「日本の體育」、「戦車」、「冷凍」、「電球」が、戦記映画として「マレー戦記」、「空の神兵」、「帝国海軍勝利の記録」が、劇映画として「暢気眼鏡」、「鞍馬天狗横濱に現はる」、「出世太閤記」、「孫悟空」、「青春の気流」、「春秋一刀流」、「東京の女性」、「五つの顔」、「将軍と参謀と兵」等がそれぞれ挙げられる。さらに現地人、華僑、フランス人を対象とする宣撫工作用として貸出されたものに、「戦車」、「捕鯨」、「馬の習性」、「彫刻の話」、「美の跳躍」、「工業日本、労働生活編」、「帝国海軍勝利の記録」、「空の神兵」等があり、これらはサイゴン博覧会見本市、フェにおける華僑大会で上映された[映配調査部 1943: 75]。

### 2) シンガポール陥落1周年記念行事

①啓発文化映画無料提供 >> 1943年2月10日—16日  
サイゴン エデン劇場 「ハワイ海戦」  
サイゴン マジェスティック劇場  
「佛印版ニュース特別編集版」  
サイゴン カジノ劇場  
「佛印版ニュース特別編集版」

ショロン、中国戲院 「日本の體育」  
 ショロン、太平戲院 「日本の漁業」  
 ショロン、エデン劇場 「日本の工業」

「佛印版ニュース特別編集版」「秋刀魚（佛字版）」  
 「雪に集ふ（安南語）」  
 音楽 レコード数枚（大使府提供）[映配 1943:75]

②スライド映写 2月10日—16日

前項の啓発文化映画を無料貸出せるサイゴン、  
 ショロンの各劇場に映写

③文化工作用劇映画配給上映 2月10日—16日

サイゴン エデン劇場 「将軍と参謀と兵」佛字版

④邦人招待映写会 2月15日

劇映画「五人の斥候兵」佛印版、文化映画「花と  
 受粉」 日本ニュース 第135号

⑤野外映写会 2月15日

ショロン 対華僑宣伝 観覧人員 2,000人  
 「廣東通信（佛字版）」「日本海軍（佛字版）」「佛  
 印版ニュース特別編集版」  
 「雪に集ふ（安南語）」「僕らの翼（安南語）」「水  
 泳日本（佛字版）」

⑥野外映写会 2月15日

サイゴン市 ペトロスキー小学校広場 対現地人  
 観覧人員 10,000人  
 「日本海軍（佛字版）」「美の跳躍（佛字版）」「秋  
 刀魚（佛字版）」「佛印版ニュース特別編集版」「雪  
 に集ふ（安南語）」「僕らの翼（安南語）」

⑦野外映写会 2月16日

サイゴン市 ジャロン大学前広場 対現地人  
 観覧人員 5,000人  
 「日本海軍（佛字版）」「美の跳躍（佛字版）」「秋  
 刀魚（佛字版）」「佛印版ニュース特別編集版」「雪  
 に集ふ（安南語）」「僕らの翼（安南語）」

⑧映画と音楽の夕 2月17日

サイゴン市 阮文好戲院 観覧人員 1,000人

3)祝 陸軍記念日講演2とレコードの会 3月10日

目的：対現地人宣伝

サイゴン市 阮文好戲院 観覧人員 1,000人  
 「1,053で満席だが入場できない群衆が入場の機会  
 を狙い劇場前に立ち尽くした」[山根 1943b:12]。  
 講演：合同事務所松崎雅夫氏「日本ニュース」2  
 巻「佛印版ニュース」1巻「昭南等誕生」2巻「雪  
 に集ふ（安南語）」

音楽 レコード数枚（大使府提供）[山根 1943b:12]

4)海軍記念日 5月27日海軍記念日周辺

全3回の経験により「映配」以外の各文化会館が  
 活発な運動を展開した。

一方「映配」仏印支社も「ハワイ・マレー沖海戦」  
 や「海軍戦記」を武器に宣伝効果をあげた。

①特集ニュース無料提供 5月25-30日

日本海軍の偉容、電撃作戦をしめす映画  
 サイゴン マゼスチックシネマ、シネマレックス、  
 シネマアッサム「特集海軍ニュース」1巻  
 ショロン（ホーチミン市（チョロン））太平洋戲  
 院 シネマアッサム「特集海軍ニュース」1巻

②スライド映画 5月25-30日

海軍の戦果を示す幻燈を一斉に映写  
 サイゴン エデンシネマ、マゼスチックシネマ、  
 カジノシネマ  
 ショロン エデンシネマ、中国戲院、

③文化工作用劇映画配給上映 5月25日-31日

サイゴン エデンシネマ  
 「ハワイ・マレー沖海戦（佛字版）」  
 ショロン 中国戲院  
 「夏威夷馬來沖海戦（華字版）」

- ④学芸会と映画の会（対安南人宣伝） 5月23日  
日本語学校の安南人生徒による学芸会と無敵日本  
海軍の映画  
サイゴン 阮文妙劇場  
映画「特集海軍ニュース」1巻、「仏語版ニュー  
ス」1巻、「海鷲」3巻

- ⑤講演と映画の会（対華僑宣伝） 5月27日  
ショロン 中国戲院  
映画「世界電影新聞」1巻、「海軍戦記」9巻、講  
演須知海軍中佐

- ⑥講演と映画の会（現地人） 5月27日  
サイゴン 市立劇場  
映画「愛国の花」1巻、「海軍戦記」9巻、講演合  
同事務所松崎雅夫 入場人員 2,000人  
「会場3時間前より観衆詰めかけ多数の警官を動  
員して整理にあたったが群衆は場内に流れ込み、  
場外にあふれた6-7,000人の大衆はカチナ通りの  
広場を完全に埋めてしまった」[山根 1943b:12]。

- ⑦野外映写会（対華僑宣伝） 5月28日  
ショロン 観覧人員 5,000人  
映画「新京」2巻（満鉄提供）「僕らのダンケツ」  
1巻「世界電影新聞」1巻「特集海軍ニュース」  
1巻「海鷲」

- ⑧野外映写会（対華僑宣伝） 5月28日  
サイゴン 観覧人員 15,000人  
映画「愛国の花」1巻、「海軍戦記」9巻  
[山根 1943年8月:12]

7.と8. フィルム数に限りがある中、華僑向けと安  
南人向けで作品を使い分けていることがわかる。

1943年に入り「孫悟空」以下3作品の不成績の対  
策とし、ベトナムで初めて「母子草」で、チラシ、新  
聞、ラジオ、試写会などの宣伝活動を行い一週間満席  
の成功を収めた。その後同様の宣伝活動を行い、「五

人の斥候兵」、「ハワイ・マレー沖海戦」の成功につな  
げた[山根 1943b:14-15]。

#### (5) 1943年の一般映画館の状況

1943年のベトナムの映画状況について記述すると、  
フランス映画が中心だがほとんどは、1941年以前の  
フィルムで、戦争により新規映画は枯渇していた[山  
根 1943b:14]。

1943年5月のサイゴン（Sài Gòn）新聞に、ハノイ  
で前述のエデン、オリムピア、モデルンのエデン系と  
マゼスチック、マゼスチック・バックマイ、フィラモ  
ニックのマゼスチック系の映画広告が掲載されてい  
る。その題名を抜粋すると、

5月12日

*Le Voleur de Bagdad Les.*

1940年邦題:「バグダッドの盗賊」

*Les voyage de Gulliver*

1939年「ガリバー旅行記」

*Episode* 邦題「女ひとり」

1935年 オーストリア [キネマ 1972:72]

*Les quatre frères Dalton*

4人のダルトン兄弟、アメリカの有名な泥棒映画、  
同名映画は多いのだが本作品を同定となる戦前作  
品は確認できていない

*Bonheur en location*

1938年

*Jeunesse, à toi le monde*

出典不明、仮訳: 若者よ、世界は君らのもの

*Pour la Justice*

出典不明、仮訳: 正義のために

MODERN

1° -- *The Lawless frontier*

出典不明、

2° -- *Far-West Mélody*

オリジナルタイトル：THE BIG SHOW

1936 年 - アメリカ白黒映画 71 分

上記の作品から、日本映画の上映がない期間は、開戦前の古いフランス映画およびフランスでリメイクされたアメリカ映画を上映せざるを得なかったことがわかる。

## 6. マジェスティックとの契約 - 仏印のほぼ全映画館に行き渡る長編日本映画

映画配給社印度支那フィルム・シネマ協会（エデン系）とは契約が結ばれていた。フィルムシネマは仏印内に配給さるべき日本映画について優先的に選択権を持ち、映配支社は、フィルムシネマに対して日本映画のみによって組み合わせたニュース一本、文化映画一本、劇映画一本よりなる一番組を三週間ごとに供給する。また、ニュースだけを単独に提供する取り決めもあった。

1941 年、山根が初めてもう一つの配給会社であるマゼスチック系会社の訪問状況は「佛印シネマ劇場協会本社支配人マダム・シュヴェラーに面会をしたるも。日本映画に興味なしと称し、甚だ無礼なる応接を受けたり」「一本の輸入無くとも優に 2 年間はやって行だけのストックがある」との対応であった〔山根 1943a:7〕。

1943 年になると「マゼスチックもさすがに今では古物映画ばかりとなり如ふるにカーボン其他の興行資材の欠乏で困ってゐる様である。それでも先方からはまだ『日本映画を是非上映したいから供給して貰ひ度い』と正式に言つて来たことはない」との状態であった。〔山根 1943a:8〕

巡回映写活動は、従来単発的に行われていたが、これによりサイゴンのマジェスティック劇場と特約が結

ばれ、定期的に慰問映画会がおこなわれる様になった〔山根 1943b:14〕。

マジェスティックとの長編映画契約は 1943 年の 8 月になつても締結されていなかった〔山根 1943a:42-43〕。

しかしながら、仏印ではフランス映画をはじめとする外国映画はいずれも開戦前の古い映画で、日本の供給なしでは映画館の運営は厳しくなっていた。エデン系に比べ日本への対応の厳しかったマジェスティック系もさすがに背に腹はかえられず、1943 年末ごろに、年間 12 本の長編映画供給契約を締結した。

「映画館で上映するには、フランス人や現地住民が経営する既存の映画館を利用しなければならなかった。」「そこで日本当局〔正しくは映配〕はインドシナ映画劇場会社〔マジェスティック系〕と交渉して、12 本の映画を上映する権利を得た。〔出典：1943 年 12 月 15 日から 1944 年 1 月 14 日のフランス当局月次報告〕〔難波 2009:76〕。

かくして、映配は仏印の 8 割の映画館の配給権を獲得することとなった。

一方、南方での映画制作であるが、日本軍政下の 1943 年にジャワ、1944 年ではボルネオで日本の支援のもとに映画が作られた<sup>21</sup>。仏印での撮影された作品は少ないが、「運命」「ボーイ・テーク」「怖れるテーク」「佛印の富籤」「成功の歌」の 5 作品がサイゴンで撮られた〔大東亜映画圈要覧 1944：28〕。

以上、1943 年まで、主に『映畫旬報<sup>22</sup>』を一次資料として仏印での日本映畫の状況を記してきたが、映畫雑誌第二次統合にあたり『映畫旬報』は 1944 年 12 月 1 日『映畫評論』と『新映畫』にわかれることになった〔映畫旬報 1944 年 11 月 21 日号:15〕。映畫評論は 1944 年月刊として発行されたが、1944 年暮れからは隔月、季刊となり南方の記事は少なくなった。また 1943 年から 1945 年までの散逸した未刊行下書き原稿が、東京国立近代美術館フィルムセンター監修により、2006 年に刊行されたが、こちらも仏印など南方の状況報告は少ない。そこで、仏印処理後の状況についてはフランスに保管されている新聞から状況を把握する



こととしたい。

### 第3章 仏印処理後の状況(1945年3月—8月)

KBSの関連組織である、文化会館（在仏印日本文化会館）の幹部職員であった小牧近江、小松清は1943年から1945年まで文化会館に従事していたが、1945年3月9日に小牧近江らが事前に知らない中で〔小牧：161-164〕仏印処理が行われた。

#### 1. ベトナム語紙『ビンミン』Binh Minh

仏印処理直後に新聞発行が行われた第一の理由は、対仏印文化工作の目標と方法の中で、仏印処理前にできていなかった「新聞雑誌（佛蘭西は之これを禁ず）の發刊を行ひ、」〔笹原 1941:85-86〕にあると考える。

仏印処理の直後からハノイで発行されたベトナム日刊新聞に『ビンミン』（Binh Minh<sup>23</sup>）がある。発行者は「大越新青年機関」であり、5月9日（42号）から「ベトナム新青年機関」と改名された。1945年3月12日に第1号が発行された。これは村上さち子が記している「3月12日に、ベトナム語新聞が、憲兵隊の勢力下ではあるが、発行された。」〔村上 1984:506〕に記載された新聞と考える。『ビンミン』は1945年3月12日の第1号から8月27日の第133号まで（53号から61号は欠番）続いた。

『ビンミン』の発行には日本文化会館が関わっていた〔Tanaka2017:357〕。当時、文化会館の事務局長であった小牧近江と顧問をつとめていた小松清が、グエン・ザン、カイ・フン、グエン・ゾアン・ヴァンに依頼し、カイ・フンとグエン・ザンが応じた〔Vũ Bằng1972:21〕〔田中 2017〕。また『ビンミン』の紙面からカイ・フン<sup>24</sup>主筆、グエン・ザン<sup>25</sup>編集長として開始したことは確認できる。文化会館の事務局長であった小牧近江は、極東学院の金永鍵を通じてカイ・フンと知り合いになったことを記している〔小牧 1965:156〕。自力文団を主宰したニャット・リンの弟、グエン・トゥーン・バックは、独立獲得にむけた宣伝活動として『ビンミン』誌を利用したと述べている

〔Nguyễn 1998〕〔田中 2017〕。日本側の資料から小松、小牧が『ビンミン』に関わっていたとの直接的な証拠はみあたらないが、小松、小牧、カイ・フン、グエン・ザンらの交友関係については小松の著書で確認できる〔小松 1941:123〕〔小松 1954:346〕。

『ビンミン』は現在ベトナムではほぼ入手できない。グエン・ヴァン・キムらによればベトナム国家図書館に2-8,124,127,129-133号が収蔵されているとあるが〔グエン・ヴァン・キム他 2015:353〕、筆者が2017年に国家図書館訪問で閲覧依頼したところ、目録にはあるが（データ：マイクロフィルム）は紛失しているとのことであった。今判明している世界で唯一の収蔵場所はフランス・エクサンプロバンスのフランス国立海外領土文書館（ANOM）のみである。

同文書館の収蔵資料を分析した結果、今まで実態が明らかでなかった仏印処理から8月革命までのベトナム、特にハノイ周辺の状況の一端を把握することができた。

『ビンミン』の発行者は「大越新青年機関」であったが、5月9日から「ベトナム新青年機関」と改名した。

<8号3月28日>発行人：大越新青年機関；

主筆カイ・フン

<42号:5月9日>発行人：ベトナム新青年機関；

主筆カイ・フン

経過とともに『ビンミン』の主筆は次の通りに交代した。

1. カイ・フン（1945.3-1945.5.21）

2. グエン・ザン

（名目：1945.6.1-1945.8.18 実際は6月20日まで）

3. 上記に2名とは別の人物（1945.6.21-1945.8.18）

4. ビンミン（1945.8.20-8.27）ベトミンへ移管。

紙面を見るかぎり3月から4月に関しては日本の影響は全くなく、日本関連記事は同盟通信社等による戦況ニュースを除くとほとんどなかった。5月になって主筆であったカイ・フンは5月21日コラム「小事話（Chuyện vụn vặt）」を最後に『ビンミン』から離脱した。

主筆が不在となった5月22日から5月30日までは新聞は存在しない(ANOM 保管新聞も欠番となっている)。筆者は主筆の脱退により新聞発行そのものがなかったのではないかと推測する。6月1日からグエン・ザンが主筆を兼務する形で新聞は再開した。5月からグエン・ザンが推奨提案していた新しいベトナム国語<sup>26</sup>での新聞発行で再開したが、この新しい印刷方式は数日ほどでなくなった。グエン・ザンはカイ・フンの穴を埋めるがため多くの署名記事を発していたが6月26日を最後に、グエン・ザンの署名記事はなくなった。その後に発行の主体が大越民政党に変わり、グエン・ザンは最後まで名目だけの主筆になってしまった。

## 2. 広告から見る『ビンミン』

5月の中頃になると『ビンミン』の二面に広告が掲載されるようになる。これは『ビンミン』の厳しい経済基盤を補助するためと考えられる。広告のスポンサーは戦中期の他の新聞と同じ現地企業(現在までも存在しているスポンサーもある)であり、日本企業のものはない。また日本軍の関与もあり見られない。広告例は以下の通りであるが映画館の広告も見られる。

8月2日の広告: タバコ2件 LION..MICANOH, EROS..VIRGINA, 歯磨き1件 GLYCERINA、理髪 HIỆU CAO và NHÀ TẮM P.N.Phuc, 薬 ĐẠI QUANG ĐƯỢC PHÒNG, 映画1式 (7/27-8/2)

## 3. 1945年4月から6月のハノイの映画上映状況

仏印処理後の4月と5月映画では当時の残った新聞 [Tin mới: 1945. 4. 25] [Tin mới: 1945. 6. 2] [Tin mới: 1945. 6. 5] [Tin mới: 1945. 6. 9] から1943年広告掲載の上映館のうちモデルンは無くなっていた。閉鎖の可能性もあるが1945年に日本の観光局製作の地図にモデルンが掲載されていることから単に広告を出さなかったと考える(映画旬報によればモデルンは入場料の低価な2,3流館となっている[映画旬報特別号1942年4月1日:16]。映画のタイトルはいずれもフランス語であるが、該当するフランス映画が存在しないことと戦時中フランスからの映画購入が困難となっていた[映画旬報特別号1942年4月1日:16]ことから、日本映画である可能性があると考えられる。

## L'ENVOLEE DANS LE SUD

南に舞い上がる = 「愛機南へ飛ぶ」か。

The image shows a collage of various advertisements and notices from a Vietnamese newspaper. The text is in Vietnamese and includes the following:

- Notice:** "Xin chú ý" (Attention) regarding a French citizen's status and a request for a passport.
- GLYCERINA:** An advertisement for toothpaste, stating it is the best.
- HIỆU CAO và NHÀ TẮM P. N. Phuc:** An advertisement for a hair salon and bathhouse, located at 37 Rue de la Paix.
- LION... MICANOH:** An advertisement for cigarettes, stating they are the best.
- EROS... VIRGINA:** An advertisement for cigarettes, stating they are the best.
- Notice:** "Chương trình phim ảnh tuần lễ này" (Film program for this week) listing movies like "MAJESTIC", "PHILARMONIQUE", and "EDEN" at the "Majestic" cinema.

図1

*LE DEVOIR DE CHACUN*

みんなの義務→フランス映画不明→邦画の可能性あり。

*LE VENUS DE L'OR*

*La Vénus de l'or* (film, 1937) Golden Venus

*APRES LA PLUIE LE BEAU TEMPS*

仮訳：雨のち晴れ、不明。Après la pluie, le beau temps est un film de Cecil B. DeMille. américain (1919) という 1919 年の映画が存在するが時間が経過しすぎているので同一かは不明である。

*LE MIOCHE* : 1936 film français、邦題：「赤ちゃん」

*L'AMOUR DE SON PROCHAIN* 彼の隣人の愛

*LES AILES QUI S'OUVRENT* 開く翼

*Les ailes s'ouvrent*: 1921 film France か？

*IDEAL DU MARIAGE* --> 1942 邦画

「結婚の理想」と思われる。

*MISTER FLOW* 1935 年仏 邦題

1940 年「フロウ氏の犯罪」

#### 4. 1945 年 7 月から 8 月のハノイの映画上映状況

『ビンミン』108 号（7 月 7 日）から映画館の広告が載るようになった。広告掲載映画館は 6 月までに他のベトナム新聞に載っていたのと同様であり『ビンミン』130 号（8 月 23 日）まで映画広告は掲載されていた。7 月 7 日から日本映画広告が多くなったことから、映配らによる何らかの日本映画推進活動が試みられたと考える。映画の多くは、1943 年封切りされた、南方向け映画が中心となっていた。「轟沈」、「愛機南へ飛ぶ」、「あの旗を撃て」などのいわゆる戦争プロパガンダ映画のみならず、「慈悲心鳥」のような純粋に国際的にも学術価値の高い文化映画も上映されていたことから、単に日本の戦争プロパガンダ映画が上映され

たわけではなかったと考えられる。上映された映画は下記の通り 19 作品に及ぶ。上映された映画は下記の通りであり、海外向けとして選定された映画が多いのがわかる。上映映画の概略も付記する。

#### <海外映画選定委員会選定映画>

##### <劇映画>

1943 年 南方全区「若き日の歓び」東宝、原節子、轟夕起子、高峰秀子出演

3 人の娘が都会の雑踏の裡（うら）に各々の幸福を求めて選ぶ、その生き方を明るく描く。原節子、轟夕起子、高峰秀子 [FC 2006c:91]

1943 年 南方全区「青空交響楽」大映、霧島昇、小林千代子出演

父の牧場を継ぐことになった音楽好きな青年が、楽団を建設、農村の生活を明るく楽しいものにしていこうといふ音楽映画、（1 月 11 日白系 対外向け）[FC 2006c:31]

1943 年 南方全区「愛機南へ飛ぶ」松竹、笠智衆出演  
荒鷲の育成過程とその闘魂と、愛児を空の勇士として捧げ自らは航空機生産の戦場に身を投ずる日本の母の愛情と献身を描く。（9 月 16 日白系 推薦 国民映画 課外用 青年向 対外向）[FC 2006c:29-30]

1944 年 南方全区「あの旗を撃て」

東宝；阿部豊監督・大河内伝次郎・河津清三郎出演 [FC 2006c:28]

フランス語タイトル：“*L'aube de la liberté*”  
フィリピン島コレヒドール作戦を描いた映画。本作品は唯一フランス語タイトルがネットで確認できる。

<https://www.vodkaster.com/films/l-aube-de-la-liberte/1384183>

（最終接続 2020 年 10 月 14 日）

#### <文化映画> [FC 2006a:298-299p]

1943 年 「陸軍航空戦記」

地上部隊のビルマ作戦に呼応した雄大なる



图 2

ビルマ航空作戦を描く長編記録映画。[FC  
2006c:455]

1943 年 「スポーツ一年」

1943 年 「日本の大学」 日映 \* 南方向け作品 [FC  
2006a:298]

1943 年 「海のますらお」 国際観光局 \* 南方向け  
作品 [FC 2006a:299]

\* 南方向け作品〔南方向けに作られた作品、および国内向け映画の中から南方向けに相応しくない部分を、修正または削除し南方向け作品としたもの〕

### ＜一般映画＞

## ＜劇映画＞

1943 年「歌行燈」東宝 原作：泉鏡花 花柳章太  
郎、山田五十鈴出演

明治 30 年頃に起こった謡曲界の 1 挿話に  
取材、厳しい芸道精進の精神と苦心を描く  
(2 月 11 日 紅系) [FC 2006c:37] <文化  
映画>

1943 年「護る影」大映 嵐寛寿郎主演。嵐寛寿郎  
出演。

女曲芸師、主家断絶を復仇せんとする浪士の陰謀等をめぐって展開される右門捕物帖の一遍。(2月25日白系 日一般) [FC 2006c:52]

### ＜文化映画＞

1943 年「我等は日本小国民」 日映

昭和 18 年，戦時下の将来を背負って立つ  
少年団員の訓練を描く（1 月 8 日白系 課  
外用）〔FC 2006c:459〕

1943 年「慈悲心鳥（じひしんちょう）」 理研

鳥写真映画の専門家下村兼史<sup>27)</sup>による作品。富士山麓に棲む数多い鳥類の中から、不思議な繁殖法を見せる杜鵑（とけん）属を取り上げ、その生態を独自の望遠撮影によって捉えた異色作である。この種族の鳥には例えばホトトギス、カッコウ、ツツドリ、ジヒシンチョウなどが居り、これらの鳥はそれぞれの卵を託す仮親がきまっていて、ツツドリはセンダイムシクイの巣に卵を預け、ジヒシンチョウはコルリの巣を狙う。[フィルムセンター 1973:13:6] 文化記録映画として国際的に学術評価も高い。

1944 年「轟沈」 大映 " 昭和 19 年度日本文化映画  
総覧 p461

インド洋上に於ける潜水艦の作戦記録，渡辺義美演出（1944 年 4 月 20 日紅系 推薦）[FC 2006c:483]．ベトナム語に訳された「『ビンミン』新聞広告」

(下記は封切年度不明だが仏印の在庫映画リストで確認した)

「美の跳躍」

「東京—北京」□

「冷凍」

### ＜其他映画＞

1943 年「ナカヨシ行進曲」昭和 18 年度其他日本映画総覧 p638

「ラヂオでお馴染みの関屋の小父さんのお話の映画化」[FC 2006c:638]。



### ＜満鉄映画＞

「新京」満鉄提供〔映画旬報 1943 年 8 月 1 日号 :12〕  
 新京 HSINKING：現在の長春。なお満鉄  
 映画と満映は 1943 年に統合された。

### ＜フランス等の映画＞

*Tamara la complaisante* 1938 年フランス映画（仮  
 訳：独りよがりのタマラ）  
*Le Récif de Corail* 邦題「サンゴ礁」〔キネマ 1972:  
 140〕

フランス映画を中心とする外国映画については  
 1940 年以前の作品のみであり引き続き戦争が継続し  
 ている中、映画の輸入が不可能であったことがわかる。

## 終わりに

日本は国際連盟脱退後、国際文化交流活動が必要と  
 考え、国際文化振興会（KBS）を設立し 1934 年外務  
 省の外郭組織として法人化した。アジア太平洋戦期の  
 仏印においては軍政が敷かれず、建前上は独立してい  
 たため、仏印における KBS による文化活動は積極的  
 に推進されていった。戦争当初は外務省の出先である  
 大使府が中心となっていたが、1943 年以降仏印日本  
 文化会館が中心となった。

しかし、映画法制定により映画上映許可の権限を  
 握った内閣府情報局が南方映画工作を画策する。仏印  
 から要望のあったニュース映画、文化映画供給依頼を  
 逆手にとって、日本映画による南方進出を図り、国策

会社南洋映画社を設立した。南方に派遣された山根正  
 吉は困難な状況のなか、日本映画を年 12 本供給する  
 契約を仏印の大手配給会社と締結することができた。  
 又 1941 年 10 月、最初に供給した「田園交響曲」がヒッ  
 トして、主導権を握った情報局は戦争が始まると南洋  
 映画社を南方進出の拠点とし、仏印は南方進出の橋頭  
 堡となった。

本稿の分析により 1943 年まで多くの日本映画が仏  
 印で上映されていたことが明らかになった。1944 年  
 以降についてはさらなる一次資料の発掘に努めるべ  
 く、今後の課題としたい。ただし、その中で唯一仏印  
 処理後、日本が関与して発行され、フランスで保管  
 されている『ビンミン』新聞の映画広告分析により、  
 1945 年 7 月から 8 月にかけて日本映画 19 本が上映さ  
 れていることが明らかになった。

以上から、仏印での映画による文化工作の始まり  
 が、内閣府情報局による南進策推進と密接に関係して  
 いたことがわかる。またフィリピンやインドネシアの  
 ような他の日本占領地の映画文化工作が、実績は多く  
 あるがほとんどが日本占領下で軍により強制的に映写  
 されたいものであるのに対し、仏印では大使府の配  
 下となり民間商業ベースで現地の配給会社の合意を  
 通じて、他の占領地とは一味違った民間商業ベース  
 での文化工作が行われていたことも指摘しうる。また  
 1943 年までではあるが、どのような映画が上映さ  
 れていたか、またどのような評判を得ていたかとい  
 ても明らかにすることができた。今後は、1944 年から  
 1945 年 3 月の仏印での日本映画の上映状況に関する  
 資料の開拓に努め、戦中の映画による文化工作の全体  
 像を明らかにしていきたい。

## 注

- 1 戦前・戦中の仏領印度支那の略称、東京<sup>トンキン</sup>（北部）、安南（中部）、交趾支那<sup>コーチシナ</sup>（南部）のベトナム三国とラオス、カンボジアを加えた五国を指すが、ベトナムのみを指す場合が多い。
- 2 ヴォ ミン ヴは『映畫旬報』1942年9月1号と1943年5月1日号を資料とし「アジア・太平洋戦争期の仏領インドシナにおける日本の文化政策」で映画の文化工作を論じている。しかしながらヴォは『映畫旬報』の他の号や、その後継誌である『映画評論』を参照しておらず、さらには『ビンミン』を通しての仏印処理後の日本映画上映には言及していない。
- 3 軍政下では文化交流活動はできなかった。
- 4 例えば、「各都市で絵画展、写真展、コンサート、演劇など様々な文化行事が催された」[難波 2006:201]。
- 5 例えば、白石昌也。1984「チャン・チョム・キム内閣設立（1945年4月）の背景 - 日本当局の対ベトナム統治構想を中心として」、横山正幸。2017『外交官・横山正幸のメモワール』
- 6 外務省の外郭団体。2015年から独立行政法人となった。英語は Japan Foundation、ハノイには日本文化交流センターがある。2003年-2011年までの理事長は元ベトナム大使（1994-95）小倉和夫氏。主なイベントは文化芸術交流、国際映画祭、日本語能力試験、日本語教師育成、日本研究、知的交流、調査研究、情報提供。
- 7 大正6年東大法卒業、大正8年第28回文官高等試験合格。1943年ハノイ総領事を最後に退官。
- 8 芝崎によれば、「日本語会話袖珍本」が日仏安南、日安南、として刊行・配布されたとある[芝崎 1999:163]。ただしハノイ図書館で筆者が実際に閲覧したところ、日安南→日仏安南の順であった。また、華僑向けには、『効果的速成式標準日本語読本』（大出正篤著）も使われていた。サイゴンでは、日本語教育振興会の『ハナシコトバ』上・中・下、『日本語読本』巻一、巻二、『日本文化読本』、台湾の『簡易国語読本』巻一、巻二、『日本語教科書』巻一、巻二、巻三、巻四などが使われていた。日本語学校によっては、従来どおり教師作成の自主教材なども使われていた。南洋学院では、開設（43年6月）当初は南洋協会の日本語教科書や国定国民学校教科書が使われていたが、44年9月の時点では、日本語教育振興会の『日本語読本』に徐々に置き換えられつつあった[宮田 2004:43-44]。他に、松本信広『安南語入門』（印度支那研究会、1942年）、Katu Muramatu, Annam Cơ bản ngữ、1943年（村松嘉津『基礎ヴェトナム語復刊』大学書林、1957年）、南部二郎『最新自習安南語会話大全』（台北、1943年）などもある。
- 9 ベトナム人のこと。
- 10 横山が仏印資源調査団の団長を解任されたのが3月31日であり4月1日付で文化会館の館長に就任した。
- 11 在仏印日本文化会館については、同館館長横山正幸の[横山 1944]による。
- 12 エデン系会社である。
- 13 山根正吉は東和商事から南映発足に参加しハノイ支社長になった。南映から映配への再編後は映配仏印所長となった。
- 14 現在のホーチミン市の西部。ホーチミン市はサイゴン、ザーディン、チョロンが合併してできた。
- 15 午前上映
- 16 クォクグー；現在のベトナム語
- 17 オリンピア *Olympia* は1938年にドイツで製作された二部作からなる1936年ベルリンオリンピック映画。監督はレニ・リーフェンシュタールで日本では「民族の祭典」「美の祭典」として公開された。
- 18 1939年 *Le Récif de Corail*。邦題：サンゴ礁 [キネマ 1972:140]
- 19 1938年 *Adrienne Lecouvreur*。邦題：仏蘭西座 [キネマ 1972:275]
- 20 現在の Hàng Chuyền 通り
- 21 1943年「ジャワの学校」：陸軍報道班員現地報告第一輯（しゅう）日本映画社：軍政部の努力で開かれたジャワの学校における現地人の再教育場面を描く [FC2006c:415]。  
1944年「石油のボルネオ」：海軍報道班員現地報告第二輯 日本映画社。オランダ兵が爆破し去った、南ボルネオバリツクパバンの石油精製工場を復旧する海軍設営隊員の労苦を描く [FC 2006c:427]。
- 22 1919年（大正8年）東京高等工業学校（現在の東工大）在学中の田中三郎、田村幸彦両氏が『キネマ旬報』として創刊し735号まで続いた [キネマ旬報 1940年11月21日号:177-182] 1940年内務省による定期刊行物の統制により廃刊。田中三郎が答申案を出し当局に認められ1941年1月1日から『映畫旬報』として再発行され1943年11月21日まで続いた。[キネマ旬報 1940年11月21日号:91] [映畫旬報 1940年1

月1日号] [映畫旬報 1943年11月21日号]

- 23 『ビンミン』 *Bình Minh* (平明) 意味は黎明、夜明け。初期の *Bình Minh* は、大越新青年機関が発行している。
- 24 カイ・フン *Khái Hưng* 本名 *Trần Khánh Giư*, 1896-1947: 文学者。マンダリンの家に生まれアルベール・サロー校卒業。ニャット・リンと共に自力文団の主催者。大戦中、親日派大越党に参加したとしてフランス当局に逮捕された。小牧近江の知人でもある。
- 25 阮江 (グエン・ザン) (*Nguyễn Giang*), 1910-69: 文学者小松清の友人で文学者グエン・ヴァン・ヴィン (*Nguyễn Văn Vĩnh*, 1882-1936) の息子。詩人グエン・ヌック・ファップ *Nguyễn Nhược Pháp* の異母兄弟。
- 26 telex 方式の記述による新しい印刷方式: 既存のフランス語タイプライターが活用できるメリットがあった
- 27 日本最初の野鳥生態写真家。100年前にカワセミの写真を撮った。

#### 参考文献

- 石巻良夫. 1942「映画企業40年 映画法制定の前後」『映畫旬報号』5月11日号 pp. 47-49
- 映画配給社南方局調査部. 1943「南方各支社の現況と日本映画の反響」『映畫旬報』4月11日号: pp. 67-69, p.p. 73-77
- ヴォーミン・ヴ「アジア・太平洋戦争期の仏領インドシナにおける日本の文化政策」(インターネットで検索, Academia. edu のサイトにログイン, 最終閲覧日 2020年10月14日)
- 小川 忠. 「日本軍政期史料が語る歴史の多面性」『毎日経済アジア研究所』  
<https://mainichi.asia/ogawa-column> 1908 最終閲覧: 2020年10月16日
- 河路由佳. 2012「1943年・仏印から日本への最後のベトナム人留学生とベトナム独立運動—チェン・ドク・タン・フォン (陳徳清風) さん—」『日本オーラル・ヒストリー研究』第8号 2012. pp. 163-175. 日本オーラル・ヒストリー学会
- キネマ旬報. 1940年11月21日号
- キネマ旬報. 1972. 増刊 12.10号 (12月10日号)「ヨーロッパ作品全集」
- グエン・ヴァン・キム, ヴォーミン・ヴ「第二次世界大戦期における越日関係についての研究動向及び資料状況」『第二次世界大戦期のインドシナ・タイ, そして日本・フランスに関する研究蓄積と一次資料の外観』pp. 343-361 早稲田大学アジア太平洋研究センター
- 黒田 清. 1941「相互的文化の交換」「對佛印文化工作の目標と方法」『新亞細亞』9月号 pp. 77-78
- 小牧近江. 1965『ある昭和史』法政大学出版
- 小松 清. 1941『仏印への途』六甲書房  
 1954『ヴェトナムの血』河出書房
- 笹原 助. 1941「日本語・日本文字の普及」「對佛印文化工作の目標と方法」『新亞細亞』9月号 pp. 84-85
- 芝崎厚士. 1999『近代日本の国際文化交流 - 国際文化振興会の創設と展開 -』有信堂
- 白石昌也. 1984「チャン・チョム・キム内閣設立 (1945年4月) の背景 - 日本当局の対ベトナム統治構想を中心として」土屋建治・白石隆編『東南アジアの政治と文化』東京大学出版会
- ロファ, セバスチャン. 2011. 古永真一・中島万紀子・原正人訳『アニメとプロパガンダ 第二次大戦期の映画と政治』法政大学
- 大東亜映画圈要覧. 1944『映畫評論』1944年2月号 pp. 28
- 田村幸彦. 1943「南方映画工作区の現状」『映畫旬報』4月11日号 pp. 67-69
- 田中あき. 2017『カイ・フン研究 後期活動を中心に』東京外国語大学 2016年度修士論文

東京国立近代美術館フィルムセンター監修 (以下 FC と略す)。

2006a 『戦前下映画資料 映画年鑑昭和 18・19・20 年 第 1 巻』 日本図書センター

2006b. 同上 第 2 巻

2006c. 同上 第 3 巻

2006d. 同上 第 4 巻

難波ちづる. 2006 「第二次大戦下の仏領インドシナへの社会的アプローチ：日仏の文化的攻防を巡って」『三田会雑誌』 99(3) 541 pp. (189)-556(204) 慶應義塾経済学会

難波ちづる. 2009 「第二次世界大戦期インドシナにおけるフランスのプロパガンダ—日本のプロパガンダの関係に注目して」『私学雑誌』 118(11); 2009・11 [94] pp. 1939-1963

秘田餘四郎. 1942 「佛印映畫界総論」『映畫旬報』 特別号 (4 月 1 日) pp. 15-17

藤原貞朗. 2008 『オリエンタリストの憂鬱——植民地主義時代のフランス東洋学者とアンコール遺跡の考古学』 めこん

古田元夫・白石昌也. 1984 「太平洋戦期の日本の対インドシナ政策—その二つの特異性をめぐって—」『アジア研究』 23 巻 5 号

不破祐俊. 1941 「新しい映畫道を拓け」『映畫旬報』 1 月 1 日号 pp. 17-24

1943 「映畫行政 30 年」『映畫旬報』 3 月 11 日号 pp. 20-25

堀 公一. 1942 「南方民心の把握を」『映畫旬報』 11 月 11 日号 pp. 8-9

山根正吉. 1943a 『佛印映畫界の近況』 社団法人映画配給社南方局発行

1943b 「佛印映畫界の近況」『映畫旬報』 8 月 1 日号 p.p. 11-15

山根正吉、呉文孟他. 1942 「留日南方學生・大東亜映畫を語る」『映畫旬報』 2 月 21 日号 pp. 15-119

横山正幸. 1944 「日仏文化交換について」『日仏文化』 9 号 ,pp. 332

2017 『外交官・横山正幸のメモワール』 白石昌也・難波ちづる・岡田友和・白井拓朗 訳  
早稲田大学アジア太平洋研究センター

上記に加え『映畫旬報』 1941 年 1 月 1 日号 -1942 年 11 月 1 号、『映畫評論』 1944 年 1 月号から 1945 年 9 月号、『新映画』 1941 年 1 月 1 日号を参考にした。

#### 外国語文献

Nguyễn Tường Bách. 1998. “Việt Nam Một thế kỷ qua - Hồi ký cuốn một 1916-1946”, NXB Thạch Ngữ, California.

Tanaka, Aki. 2017. “Nhật Bản qua hình dung của người Việt trên báo Ngày Nay”, VIỆT NAM-GIAO LƯU VĂN HOÁ TƯ TƯỞNG PHƯƠNG ĐÔNG, ĐẠI HỌC QUỐC GIA TP. HỒ CHÍ MINH, pp. 350-360.

Vũ Bằng. 1972. ‘Tuởng nhớ Khái Hưng’, Dương Nghiễm Mậu et al., *Khái Hưng - Thân thế và tác phẩm*, Nam Hà, Sài Gòn, pp. 21-23.

#### ベトナム語新聞

*Bình Minh* 1945 年 3 月—8 月

*Sài Gòn* 1943 年 5 月

*Tin mới* 1945 年 5 月